

福岡市早良区
原 遺 跡 9

— 原遺跡群第2次発掘調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第544集

1997

福岡市教育委員会
原 遺 跡 調 査 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第544集

原 遺 跡 9

- 第 2 次 調 査 の 報 告 -



遺跡調査番号 7832

遺跡略号 HAA2

1997

福岡市教育委員会
原 遺 跡 調 査 会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には数多くの文化財が残されています。本市ではこれらの文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発によってやむを得ず消滅してしまう埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存の処置を講じているところです。

今回報告する原第2次調査は、共同住宅建設に先立って行われたもので、弥生時代から中世にわたる遺構、遺物が検出されました。

本書が文化財への認識と理解、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。発掘調査から資料整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた土地所有者など関係者の皆様に深く感謝する次第です。

平成9年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例　　言

- 本書は、福岡市早良区原6丁目631-1外の開発工事にともない、福岡市教育委員会（原遺跡調査会）が昭和54年3月から5月に発掘調査した結果をまとめた報告書である。
- 発掘調査で検出した遺構は、溝状遺構をS D、掘立柱建物をS B、井戸状遺構をS E、上坑をS Kと表記した。
- 本書で使用した遺構実測図の作成は、大庭友子、濱石正子、撫養久美子が行った。
- 本書で使用した図面類の製図は、大庭友子が行った。
- 本書の執筆は二宮・大庭・柳田が行った。
- 本書の編集は柳田が行った。
- 本書に関する図面・写真・遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。

調査番号	7832	遺跡略号	HAA-2
地番(現) (旧)	早良区原6丁目631-1、634-1 西　区原6丁目631-1、634-1	分布地図番号 (旧)	082-0311 082-A-2
調査期間	1979年（昭和54）3月19日～5月2日	調査面積	2,280m ²

本文目次

第1章	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
第2章	遺跡の立地と環境	3
第3章	調査の記録	4
1.	検出遺構	4
(1)	溝	4
(2)	掘立柱建物	4
(3)	井戸状遺構	6
(4)	土坑	6
2.	出土遺物	10
(1)	土器	10
(2)	石器	16
第4章	まとめ	16

挿図目次

Fig. 1	原遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺 1/25,000)	2
Fig. 2	原遺跡群調査地点位置図 (縮尺 1/8,000)	3
Fig. 3	遺構配置図 (縮尺 1/300)	5
Fig. 4	掘立柱建物実測図 (縮尺 1/80)	7
Fig. 5	井戸状遺構実測図 (縮尺 1/40)	8
Fig. 6	土坑実測図 (縮尺 1/40)	9
Fig. 7	土器実測図-1 (縮尺 1/3)	11
Fig. 8	上器実測図-2 (縮尺 1/3)	12
Fig. 9	下器実測図-3 (縮尺 1/3)	13
Fig. 10	石器実測図 (縮尺 1/1、1/2、1/4)	15

図版目次

PL. 1 (1~8)	発掘調査風景・遺構検出状況
PL. 2 (1~8)	検出遺構と遺物出土状況-1
PL. 3 (1~8)	検出遺構と遺物出土状況-2
PL. 4 (1~8)	検出遺構と遺物出土状況-3
PL. 5	出土上器-1 (縮尺 1/6 以外は 1/4)
PL. 6	出土上器-2 (縮尺 1/6 以外は 1/4)
PL. 7	出土上器-3・出土石器 (縮尺 1/2・1/6 以外は 1/4)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

本件は、昭和53年8月に開発事前審査願（受付番号53-64）が文化課埋蔵文化財係に提出されたことを契機としている。開発計画の内容は、申請地（早良区原6丁目631-1、634-1 2,280m²）に2棟の共同住宅を建設しようというものであった。埋蔵文化財係の事前審査担当では、申請地が原遺跡群の中に位置していることから、埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、稲刈りの終わった11月20日に試掘調査を行うこととした。

試掘調査の結果、多くの溝や掘立の柱穴群が検出され、掘立の柱穴群は溝によって区画される可能性が想定された。時期は、遺物が少ないため明確ではないが、奈良時代から中世が考えられている。検出遺構が申請地の全域におよぶことから、本調査の対象面積は2,280m²、調査期間は実働75日と積算されている。

この結果をもとに年度途中からの調査が困難なことから、次年度での調査実施に向けて協議を重ねたが、一刻も早い調査の着手を迫られ、やむなく昭和54年3月19日から本調査を実施することになった。しかも、4月中旬までの1か月で現場の調査を終了することが求められた。雨で作業ができなかつた日数や実測期間を確保するための期間延長を認めてもらい、5月2日に完了することができた。現場の発掘作業にあたっては、土地所有者や施工業者の照栄建設にご協力をいただいた。

2. 調査の組織

調査地	早良区原6丁目631-1、634-1	申請者	重松 信臣
調査面積	2,280m ²	施工	照栄建設
試掘調査	昭和53年11月20日		
本調査	昭和54年3月19日～5月2日		
調査主体	原遺跡調査会 代表 井上 剛紀（福岡市教育委員会文化課長） 庶務担当 三宅 安吉（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係） 国武 勝利（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）		
試掘担当	井澤 洋一		
調査担当	柳田 純孝		
調査補助	渡辺 和子 宮内 克己		
調査作業	尾崎 八重 金子よし子 菊池 栄子 菊池 キミ 菊池ミツヨ 薩田オリエ 菰田 洋子 柳 ツイ 住吉 知子 谷 ヒサヨ 野田部コト 原田 順子 又野 栄子 松隈ユキノ 真名子千恵子 山崎 冓子		
整理担当	柳田 純孝 二宮 忠司		
整理調査員	大庭 友子 濱石 正子 摂養久美子		
整理作業	阿部 宣子 石津満寿美 石松 悅子 牛尾美保子 海内美也子 太田 昌子 尾崎 文枝 本村 紗子 桑野 正子 高橋知代子 平山 圓 告元 幸子 山崎恵美子		



- 1. 藤崎遺跡群
- 2. 西新町遺跡
- 3. 有田遺跡群
- 4. 原遺跡群
- 5. 原東遺跡群
- 6. 飯倉遺跡群
- 7. 次郎丸高石遺跡
- 8. 免遺跡群
- 9. 田村遺跡群
- 10. 野芥大塚遺跡
- 11. 野芥遺跡群
- 12. 飯倉II遺跡
- 13. クエゾノ遺跡

Fig. 1 原遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺 1/25,000)

第2章 遺跡の立地と環境

原遺跡群が立地する早良平野は、福岡市の西部に位置し、室見川や金屑川など大小の河川によって形成された沖積平野である。早良平野のほぼ中央にあるのが中位段丘上に位置する有田・小田部の台地である。その東側に標高6~7m程の低位段丘があり、原遺跡群はこの上に立地している。東西の長さが約550m、東西の幅が約250m程の微高地で、水田面との比高差は小さい。微高地の東側には油山川、西側には有田・小田部の台地とを分けるように金屑川が流れている。

原遺跡群の調査は、1975年の第1次調査にはじまる。本件は第2次調査にあたるが、1995年までに18次の調査が実施されている。その内、約半数の遺跡について報告書が刊行されており、次第にその概要が明らかになりつつある。これらを総合すると、原遺跡群では绳文時代晩期末からの遺構が確認されている（第1次調査）。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺構は、第2次調査を含め微高地の北側に広がっていることが確かめられている。また、微高地の縁辺にあたる原談儀遺跡（第1次調査）や深町遺跡（第3次調査）では、この時期の水田跡が検出されている。また、古代末から中世の遺構は各地点に点在しており、原遺跡群の全域におよぶことがわかってきている。

第2次調査については、既刊報告書の中では1975年に刊行された『西部I』（第64集）に、「原小園では、弥生中期頃の溝、及び奈良・平安時代の溝や生活址を検出した」と記されている。次いで、1988年の『原遺跡2』（第140集）には、「遺構は弥生時代中期頃の溝、奈良・平安時代以降の溝・堀立柱建物等を検出した」とされているほか、第213集や第295集にも簡単な記述がある。これらの報告書に「原小園遺跡」としたものがあるのは、申請地の小字をもと「小園」といったことに由来している。

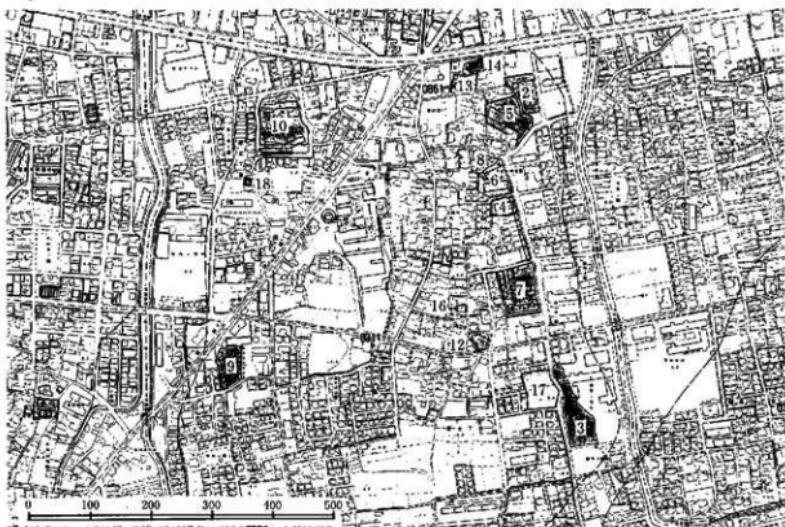


Fig. 2 原遺跡群調査地点位置図（縮尺1/8,000） 11,15次調査は下水道の調査

これまで原遺跡群で発掘調査された第1次～第18次に関する報告書は、次のとおりである。

- | | |
|--|-----------------------------|
| 第1次調査(7505)『原遺跡第一次の調査』 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第492集 1996 |
| 第3次調査(7910)『福岡市西区原深町遺跡』 | 福岡市埋文報告書 第71集 1981 |
| 第4次調査(8017)『福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告－I－』 | 福岡市埋文報告書 第64集 1981 |
| 第6次調査(8217)『福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告－II－』 | 福岡市埋文報告書 第213集 1989 |
| 第9次調査(8428)『福岡市早良区原遺跡2(第9次調査の報告)』 | 福岡市埋文報告書 第140集 1986 |
| 第10次調査(8414)『原遺跡3－原遺跡群第10次調査の報告－』 | 福岡市埋文報告書 第215集 1990 |
| 第11次調査(8812)『福岡市早良区有田・小田部14原遺跡5－下水道工事に伴う調査－』 | 福岡市埋文報告書 第266集 1991 |
| 第12次調査(8831)『福岡市早良区原遺跡4－第12次調査の報告－』 | 福岡市埋文報告書 第233集 1990 |
| 第13次調査(8839)『原遺跡群第13次調査の報告』 | 福岡市埋文報告書 第233集附編 1990 |
| 第14次調査(8908)『原遺跡6－原遺跡第14次発掘調査の報告－』 | 福岡市埋文報告書 第295集 1992 |
| 第15次調査(8986)『8966 原遺跡群第15次(HAA-15)』 | 福岡市文化財年報VOL.4 1989年度版 1991 |
| 第16次調査(9103)『原遺跡7－第16次調査の報告－』 | 福岡市埋文報告書 第337集 1993 |
| 第17次調査(9460)『原遺跡8－第17次調査の報告－』 | 福岡市埋文報告書 第444集 1996 |
| 第18次調査(9534)『9534 原遺跡群第18次(HAA-18)』 | 福岡市文化財年報VOL.10 1995年度版 1997 |

第3章 調査の記録

1. 検出遺構

調査区の南と北では、約30cm程の比高差があり、南から北に向けてゆるやかに傾斜している。近年まで水田耕作が行われており、遺構面は削平を受け遺構の残存状態は良くない。発掘調査によって検出された遺構は、溝9条、掘立柱建物5棟、井戸状遺構2基、土坑多数などである。

(1) 溝

溝は9条検出したが、SD-03～09は、浅い溝状を呈するものである。

SD-01は、調査区中央部の遺構を東から北へ囲むように巡っている。東側の長さが45m、北側は40m程確認できるが、溝の両端は南および西側につづき、全体のプランは不明。溝の南端付近では上面幅が1m、中央部の深さが30cmを測り、断面は浅皿状～逆台形状を呈する。溝の幅は60cm～1.2mで北につづき、東北の屈曲部では幅が50cmと狭くなり、深さも12cmと浅くなっている。屈曲部から西側にいくに従い溝の幅は少しづつ広がり、深さもやや深くなる。西端付近の最大幅は1.8m、深さは20cmを測る。

SD-02は発掘区の東南部に検出されたもので、SD-01より2～3m東側に位置し、SD-01とほぼ並行している。南端では幅1.6m、深さ13～17cm。溝は北側にいく程溝は深くなり、深さ30cm、幅は1.0～1.4mを測る。長さは17mづいでいる。

(2) 掘立柱建物

SB-01は梁間2間、桁行3間の東西に長い建物である。梁間の全长は3.6m、桁行の全长は4.9mを測る。柱穴は円形で、径は20～28cm、深さは15～27cm。方位はN-4°-W。

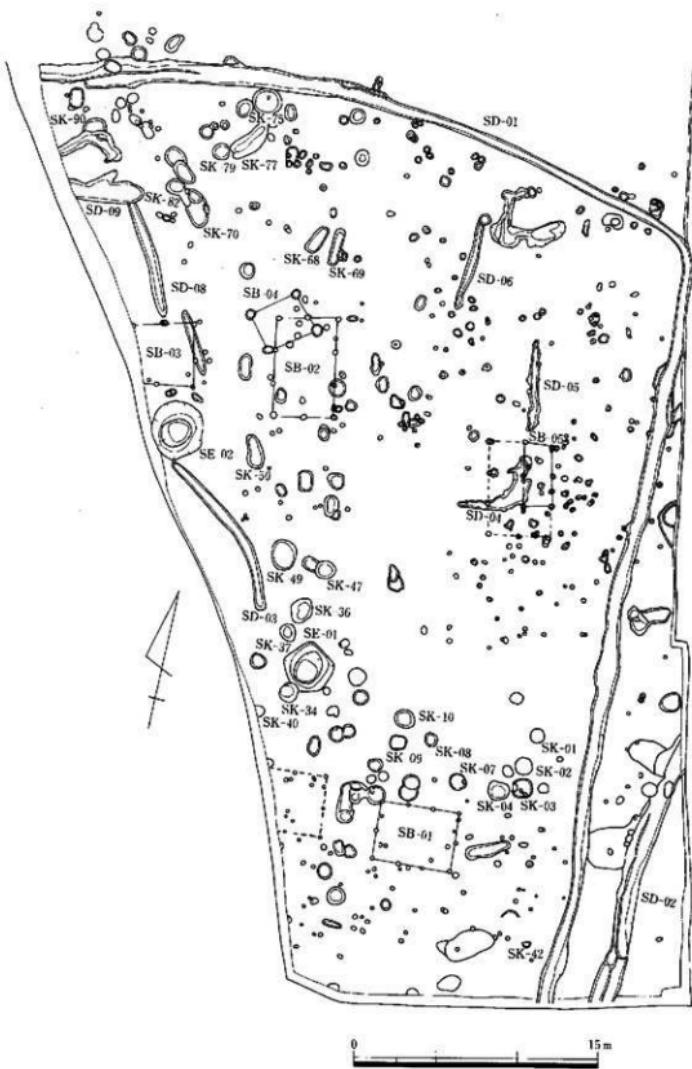


Fig. 3 遺構配置図 (縮尺 1/300)

SB-02は梁間2間、桁行3間の南北に長い建物である。梁間の全長は3.8m、桁行の全長は5.8mを測る。柱穴は円形で、径は28~36cm、深さは11~26cm。方位はN 11°-W。

SB-03は梁間2間、桁行2間まで確認できる。桁行はさらに西側につづき3間の東西に長い建物であろう。梁間の全長は3.8m、桁行の全長は3.8m+a。柱穴は円形で、径は30~36cm、深さは16~32cm。方位はN 11°-W。梁間の東側に全長3.7mの柱穴が認められるから、SB-03に切られた東西棟があったと思われる。

SB-04は1間×1間の建物で、SB-02より古い。梁間の全長が2.5m、桁行の長さは北側が3.0m、南側が3.2mとやや東西に長い建物。柱穴は円形～楕円形で、径は50~80cm、深さは30~50cmと他の建物より大型である。3つの柱穴から弥生土器、古墳時代の上師器類の胸部細片が出土している。方位はN 39°-Wと他と向きを異なる。

SB-05は梁間1間、桁行2間の南北に長い建物である。梁間の長さは南側が1.7mに対し、北側は2.0mとやや広い。桁行の全長は東側が3.6mに対し、西側は3.9mを測る。柱穴は円形で径は25~30cm、深さは11~44cm。方位はN 10°-E。桁行の西側にこれと並行する全長5.6mの柱穴がある。これをSB-05と同一建物とみれば、南側に1間広がることになり、梁間2間、桁行3間、梁間の全長が3.7m、桁行全長が5.6mとSB-02と建物の規模がほぼ同一で、方位を同じくする建物となるから、1×2間より、2×3間の南北に長い建物の可能性が考えられる。

この他、SB-01の西側には梁間2間（全長3.6m）、桁行3間になると想われる東西棟（桁行2間の先は西側につづく）の可能性が指摘できる。また、SB-05の周辺、SD-06の南側にもピットがあるが、建物としてまとめることはできなかった。

(3) 井戸状遺構

SB-01とSB-02~04の間に2基の井戸状遺構が検出された。SD-01に囲まれた中央部にある。

SE-01の上面は一辺が2.2m~2.9mの隅丸方形というより五角形状を呈し、二段に掘られている。深さ40cmで1.6~2.1mの楕円形を呈する。それより下は直径1.6mの円形で深さ30cm、全体では深さ70cmを測る。

SE-02は上面径が3.1~3.5mの円形を呈し、二段に掘られている。深さ60cmまでは直径2.7~3.5mの円形。深さ60cmからは直径1.7mとひと回り小さくなる。深さは50cmで、全体の深さは1.1mである。SE-02の出土遺物は少なく、実測図として図示するものはなかった。

(4) 土坑

数多く検出された土坑のなかから14基を図示したが、大きさや形状から3つに分けられる。

1つは、1mを超える大型のもので、Fig. 6のSK-70は1.8×2.3m、SK-50は1.0×2.1m、SK-77は1.1×3.0mの長楕円形、深さはSK-50が30cm、SK-77が50cmを測る。Fig. 3のSK-68は0.7×1.8m、SK-69は0.6×2.2mの長方形を呈し、深さは30cmと10cmを測る。

2つは、直径1m前後の円形ないしは隅丸方形のもので、Fig. 6に示した以外ではFig. 3のSK-79（径1.0m、深さ26cm）、SK-47（径1.2m、深さ53cm）などがこれにあたる。

3つは直径40~60cm前後の小型のものである。

土坑の底には円礫を敷いたものがある。1のうちSK-68や69は土坑墓状を呈するもの、3の多くは建物の柱穴と思われるが、まとまるものは少ない。

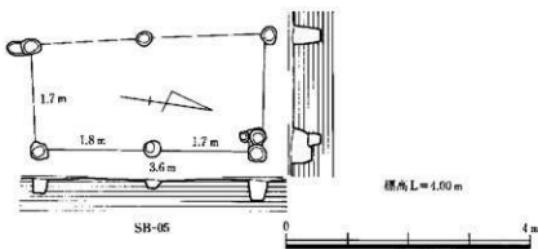
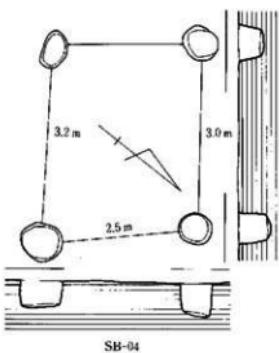
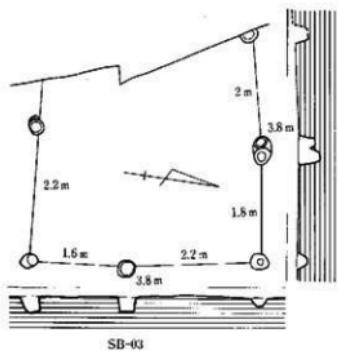
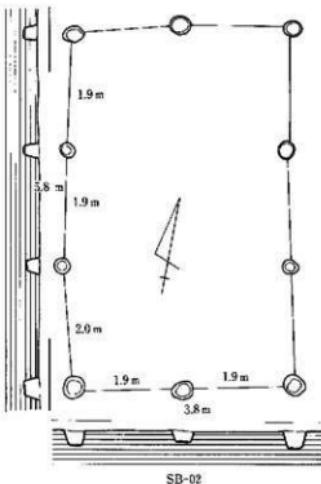
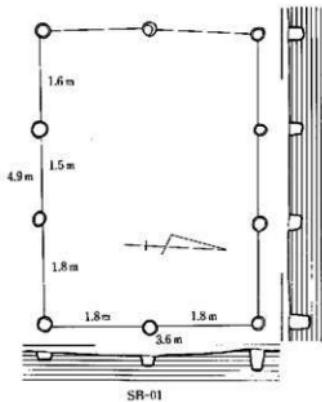


Fig. 4 挖立柱建筑物実測図 (縮尺 1 / 80)

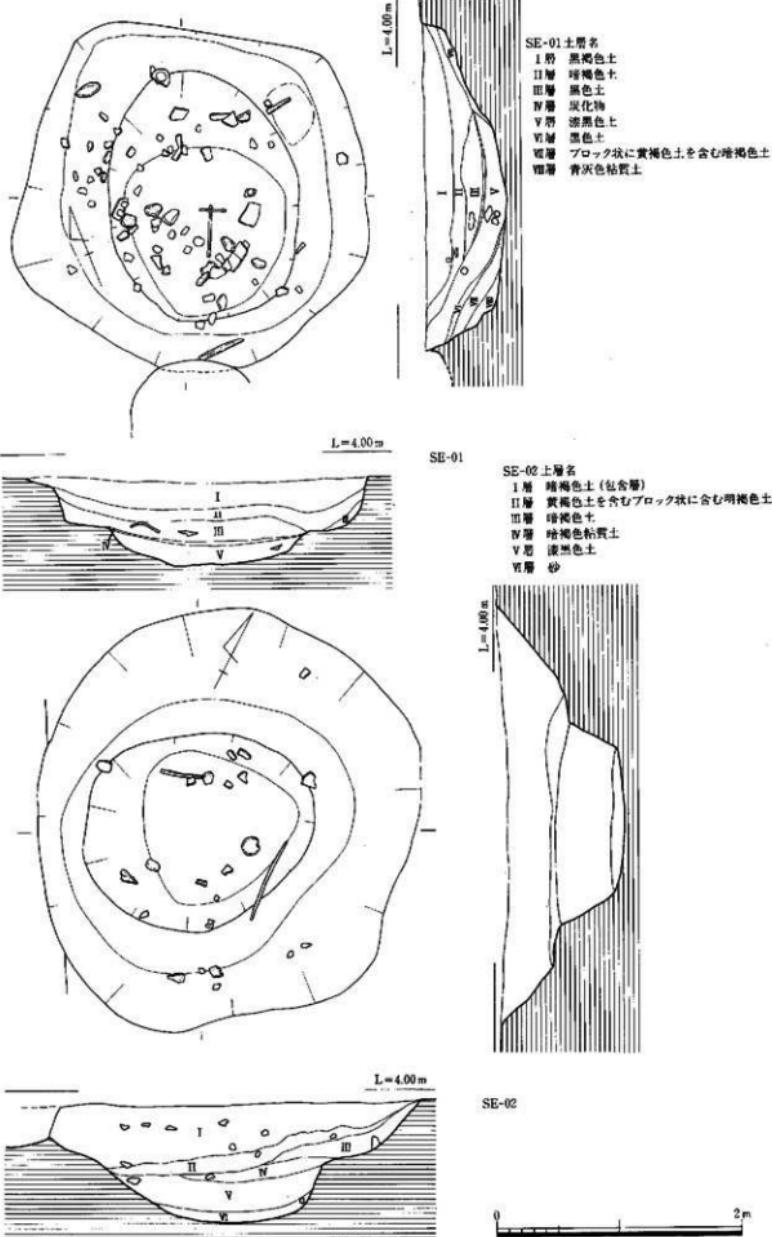


Fig. 5 井戸状造構実測図(縮尺1/40)

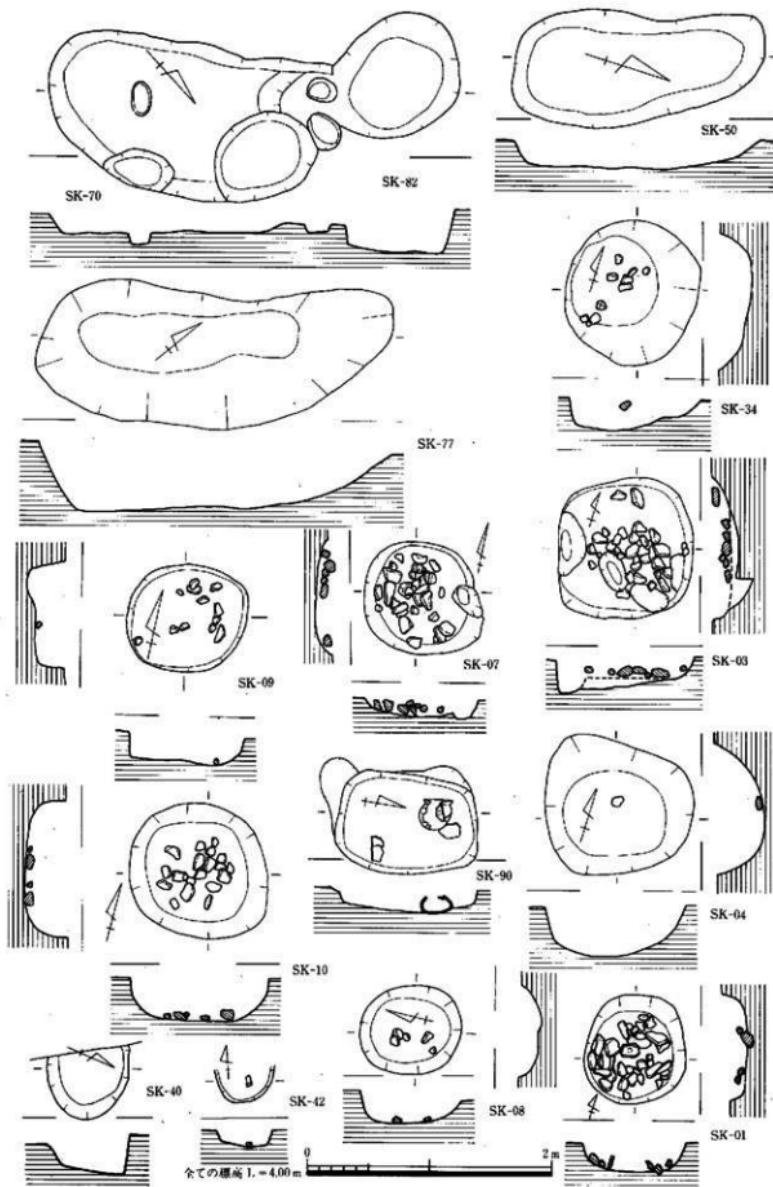


Fig. 6 土坑実測図 (縮尺 1 / 40)

2. 出土遺物

含包層・遺構から土器・石器等が出土した。

(1) 七器 (Fig. 7 ~ 9 PL. 5 ~ 7)

S E - 0 1 (井戸状遺構) 出土の土器

土師器皿、塊、鉢、黒色土器塊、瓦質土器塊の21点を図示した。

土師器 皿 (4・10・11・12・32の5点) 底部の切り離し方法は、全てヘラ切り離しで、糸切りは認められない。10を除く4点には底部に板状圧痕が認められ、12・32は平坦を呈する。4・11は強い板状圧痕のため凸凹をなす。また、体部も他に比べやや肉厚である。特に、11の底部は切り離し後の二次的な調整は行われず、粘土の縫合目が剥離するなど粗雑な造りである。体部調整は横ナデを施し、内底は静止状態でのナデを施す。4は口径8.7cm・器高1.6cmを測り、淡い肌色を呈する完形品である。10は口径8.8cm・器高1.5cm、淡い肌色を呈する。11は口径9.0cm・器高1.6cmの淡い黄褐色、12が口径9.3cm・器高1.2cmの淡い肌色、32は口径10.5cm・器高1.3cmの黄白色を呈する。4・10~12の平均口径が8.95cmに対し、32は10.5cmと大きい。

土師器 鉢形土器 (29) 復原口径は35cmを測り、底部は欠損する。湾曲しながらやや開き気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反し、端部を丸くおさめる。2~6mm大の砂粒を多量に含み、器面は剥落した部分が多く調整は不明。内面中央より下位は器表面が残っており、指頭圧痕・ナデが認められる。砂粒が全体に黒く変色していることと一部に煤が付着することから、煮炊用に使用されたものと思われる。

土師器 塊形土器 (5・19・23) 5の体部は内湾気味に開き、口縁部でわずかに外反する。高台は貼付で断面三角形を呈する。全体に磨滅しているが、ヘラけずりの後ナデを施す。内面見込みにヘラ状の圧痕が認められ、内底中央がやや突出する。口径16.1cm・高台径6.4cm・器高5.6cmを測る。19の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。内・外面ともナデ調整。復原口径は15cm。23はやや肉厚の塊で、外面は縦の刷毛目を施し、煤が付着する。内面は明褐色を呈し、ナデを施す。復原口径は17.4cmを測る。

黒色土器 塊形土器 (35・1・7・8・24・26・27・31・36) 35は内面だけを黒色処理した塊の底部で、端部を外側につまみ出し、猫足型を造り出した高台がつく。内面はヘラミガキを施し、光沢がある。外面は赤みをおびた黄褐色を呈し、胎土には多量の金雲母が含まれる。高台内には板状圧痕が認められ、周辺はナデを施す。高台径6.2cm。1の体部は丸味をおび、口縁部はわずかに外反する。器表面の磨滅が著しく、調整は不明。内面の一部に光沢をもった部分がわずかに残り、ヘラ研磨が観察できる。復原口径は16.6cm。7の体部は丸味をおび、口縁は内側でわずかに外反する。高台はやや開き気味で、高台内にヘラでX印を刻む。器面は磨滅しているものの一部にヘラミガキが認められる。外面底部付近には錆色の酸化鉄が付着する。復原口径は15.5cm・高台径5.9cm・器高5.2cm。8は底部のみの残存で外側に聞く高台がつく。調整はナデで、復原口径6.8cm。24の体部は丸味をもち中央で若干屈曲する。口縁は外側につまみ出し端部を丸くおさめる。器面調整はヘラミガキで、外面の一部に指頭圧痕が認められる。復原口径は15.8cm。26は丸味をおびた体部の中位でわずかに凹みをもつ。口縁は直線的で端部を丸くおさめる。器面調整は内外面とも横位の暗文状ヘラミガキを施す。高台は貼付部より剥落。内底中央および外面の一部はいぶしが不足しており、黄灰褐色を呈する。復原口径16.2cm。27はやや高めの高台を貼付した塊で、体部中央で屈曲する。口縁は欠損している。内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリ後横ナデを施す。1mm大の砂粒を多く含む。27も26同様いぶしが足りない

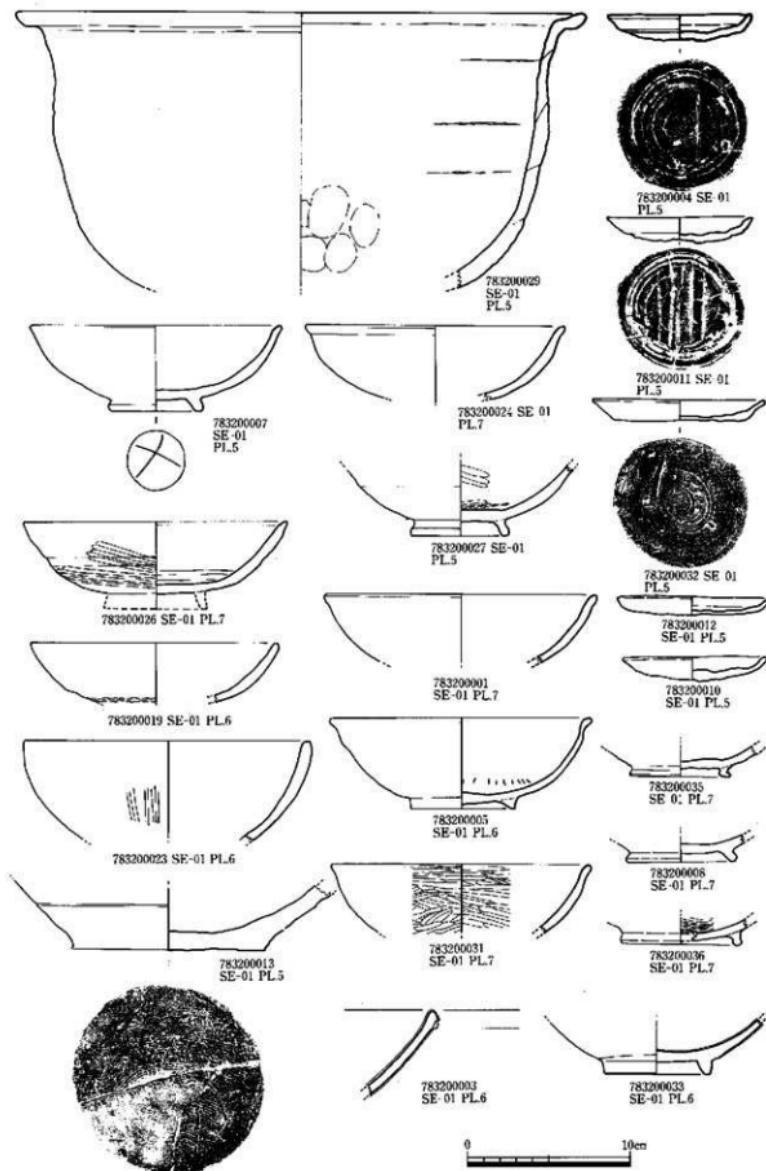


Fig. 7 土器実測図-1 (縮尺1/3)

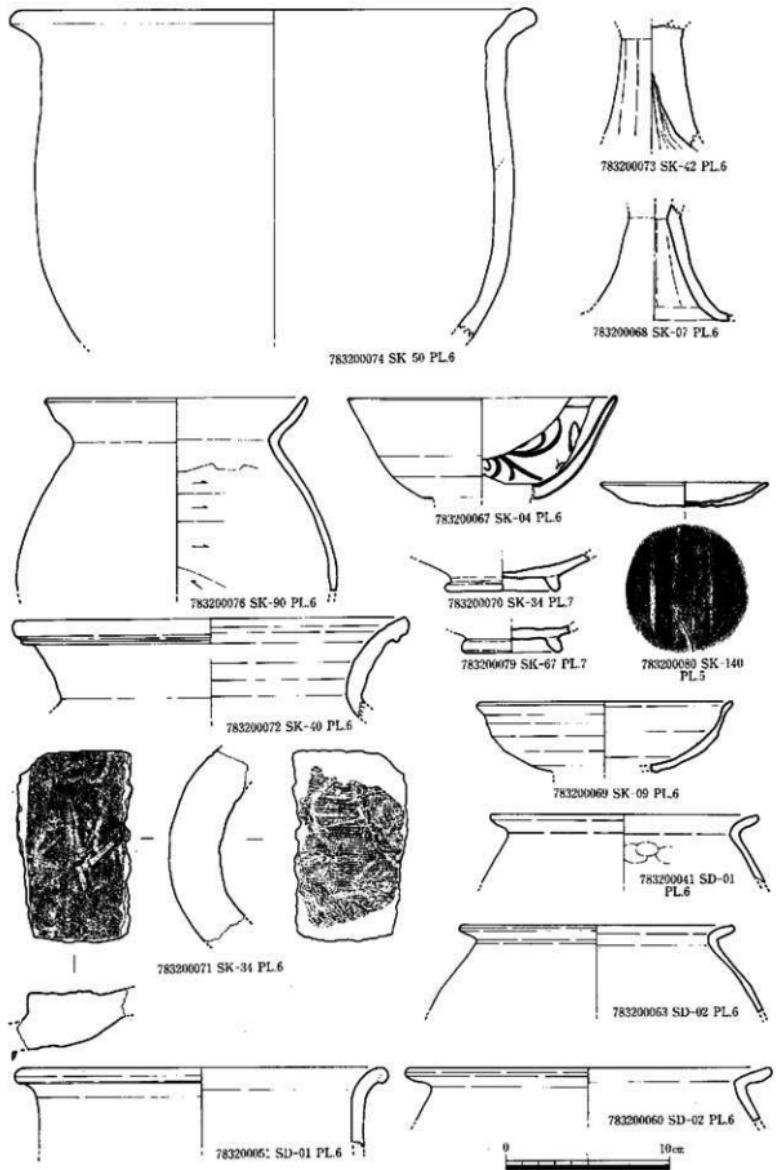


Fig. 8 上器实测图 - 2 (缩尺 1 / 3)

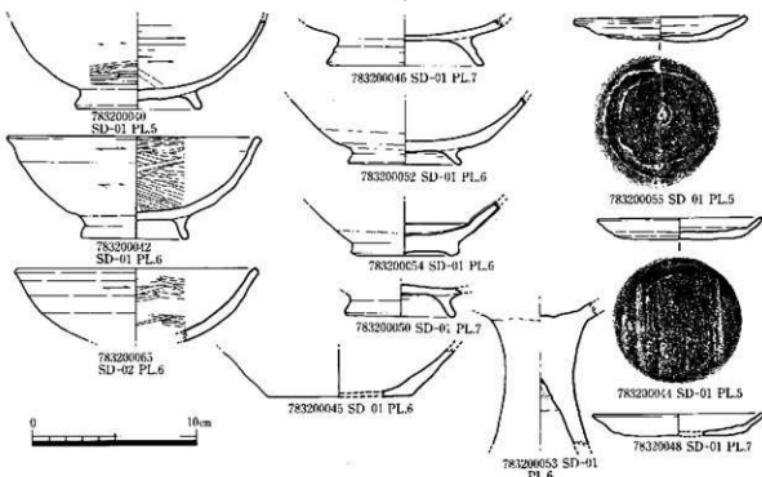


Fig. 9 土器実測図-3 (縮尺1/3)

く底部付近は黄褐色を呈する。高台径は6cm。31は塊の口辺部片で、口縁は外反する。内外面ともヘラミガキを施し、器面の状態が良好で光沢がある。復原口径は16cm。36は裾部が丸みをおびた高台がつく塊の体部片で、ヘラミガキを施す。高台の復原口径は7.4cm。

瓦質土器 壺形土器 (13) 壺の底部で静止系切りを行う。体部は回転ナデ、底部付近は指オサエを行う。1~2mm人の砂粒を多く含み、5~7mm人の小石も少量混じる。底径12cmを測り、白灰色を呈する。

白磁 瓢形土器 (3・33) 3は玉縁口縁を呈する瓶の口辺部片で、縁の部分を欠損する。青味がかかった灰色の胎土に同じ色の釉を施す。外面に買入が認められる。33は瓶の底部で、中位より口縁は欠損。高台内面を外側に斜めに削り白すもので、II類⁽⁴⁾に相当する。釉は青灰白色を呈し、底部付近まで施釉。一部は高台までおよぶ。器面に細かな水裂が認められる。

SD-01 (溝) 出土の土器

土師器 皿 (44・48・55) 44は完形品で口径10.1cm・器高1.35cmを測る。底部は厚みをもち、切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が認められる。調整はナデで茶白色を呈する。48は復原口径10.6cm・器高1.35cmを測り、底部は回転ヘラ切りを行う。55は口径10.75cm・器高1.55cmを測る。底部はヘラ切り離しで中央にへそ状の凹みを有する。体部は横ナデを施す。

土師器 壺形土器 (51) 口辺部片で復原口径23cmを測る。口縁は上端で外反し丸くおさめる。調整は横ナデ。1~2mmの大石英粒を多く含み、淡い黄褐色十橙色がかった肌色を呈する。

土師器 高杯 (53) 高杯の脚部で全体的に造りが雑なうえ磨滅が著しく調整は不明。内面上位は段を有し、しづら痕が認められる。

土師器 壺 (46・50) 46は黒色土器A類⁽⁴⁾に相当する上師器壺で底部のみの残存である。高台は薄くて高く、貼付後横ナデを行う。中央で段を有し、内側では板状の圧痕が認められる。内底は茶褐色を呈し、外面の一部には煤が付着する。高台部は赤味をおびた淡い黄褐色を呈し、径は9.6cm。50は底部のみの残存で、内底はやや膨らみをもつ。高台は開き気味で貼付後横ナデを行う。高台径3.7cm。

黒色土器 (40・42・52) 40は高台付き壺形土器で口縁部は欠損する。丸みをおびる体部に開き気味の高台がつく。高台の復原口径は7.8cmを測り、底部周辺は指頭圧痕が残り、他はヘラミガキを施す。内面は磨滅のため不明瞭ではあるがヘラミガキが認められる。外底に酸化鉄が付着。黒色土器B類。42は高台付き壺形土器で、体部は内湾気味に立ち上り中央で屈曲し、口縁はわずかに外反する。高台は高めで1.5cmを測り、中央で段を有しこの部分より外側に開く。器面は磨滅が著しいが、光沢する部分も若干残っておりヘラミガキが観察できる。外面中位より下位に指頭痕が残る。底部は回転横ナデを施す。外面に酸化鉄付着。復原口径15.7cm・器高6.6cm・器高6.3cm。黒色土器B類。52は高台付壺形土器で口縁部を欠損。高台は細く外側に開く。内面ヘラミガキ、内面ナデを施す。灰色を呈し、高台径6.85cm。黒色土器B類。

白磁 瓶形土器 (54) 底部のみの残存でIV 2類に相当。高台はまっすぐで高台内の削りは浅い。豊付の削りはシャープで外側がやや高い。淡灰色の胎土に緑色がかった淡灰色の釉を施す。釉は外底高台付近までおよび若干の貫入が認められる。内面見込みで一条の沈線を刻む。高台径6.6cm。

弥生土器 (41・45) 41は無頸壺の口縁部片で復原口径16.6cmを測る。外面および口縁内側に丹塗りの痕跡が残る。外面は磨滅のため調整不明。内面は指オサエ後ナデ仕上げ。45は壺の底部で復原口径9cmを測る。胎表面は剥落しており、調整不明。

S D - 0 2 (溝) 出土の土器

黒色土器 (65) 65は高台付壺形土器の破片で底部は欠損。口縁径は15cm。内外ともヘラミガキ。

弥生土器 (60・63) 60は壺形土器の口縁片で「く」の字状を呈する。小片のため推定であるが口径は22.6cm。全体的に磨滅が進んでおり、器面調整は不明。63は無頸壺の口縁部片で、口径は推定で17cm。外面および口縁内側は丹塗りを施す。

S K (土坑) 出土の土器

67 (SK-04) は龍泉窯系青磁碗の破片で底部は欠損する。体部は丸みをおび中位から自然に外側に開き、口縁を丸くおさめる。外面は無文、内面は口縁下に一条の沈線を巡らせ、これより下位に片切彫の蓮花文を施す。淡灰色の胎土に淡いビワ色の釉を施す。内外面とも細かな氷裂が入る。復原口径16.4cm。69 (SK-09) は土師器高台付壺で体部中央で屈曲し、口縁は肥厚し外反する。高台は欠失。外面横ナデ、内面は磨滅するがヘラミガキと思われる。復原口径15.4cm。70 (SK-34) は黒色土器壺の底部で磨滅が著しい。内面ヘラミガキで、高台は開き気味で貼付後横ナデを行う。高台径7cm。黒色土器B類。71 (SK-34) は丸瓦の一部で、表面は格子目、裏面は布目である。胎土は灰褐色を呈し、2~5mmの大砂粒を多く含み須賀質で硬い。72 (SK-40) は須恵器壺形土器の口縁部で復原口径24.2cmを測る。外面口縁真下には一条の尖帯がめぐる。外面は黒色を呈し、2~5mm幅の暗文状の圧痕が5mm程の間隔で施される。内面は黒灰色を呈し、ヘラ状の工具でナデを施す。焼成良好で堅く締まっている。復原口径24.2cm。73 (SK-42) は土師器高杯の脚部で磨滅が著しい。外面に継方向のヘラによる棱線を同じ方向の刷毛目がわずかに残る。74 (SK-50) は土師器壺形土器で底部は欠損。内湾気味に立ち上り、口縁は緩やかに外反し端部を丸くおさめる。外面は横位のナデ、底部近くで縦のナデを施す。底部近くは部分的に横・斜めの凹線が残る。内面上位は横ナデ、中位より下方は熱のため器面状態が悪く調整不明。底部に近い程器面が荒れる。外面に縫が付着し、特に中位は著しい。復原口径33cm。76 (SK-90) は土師器壺形土器(布留式)の球形を呈する胴部に内湾気味に外反する口縁がつく。器壁は薄く、調整は外面刷毛目、内面ヘラケズリを施す。内面の口縁との境は指オサエが残る。外面の一部には縫が付着。復原口径16cm。79 (SK-67) は黒色土器壺の底部で、内底はヘラミガキ、外面は横ナデを施す。高台径6.1cm。黒色土器B類。80 (SK-140) は土師

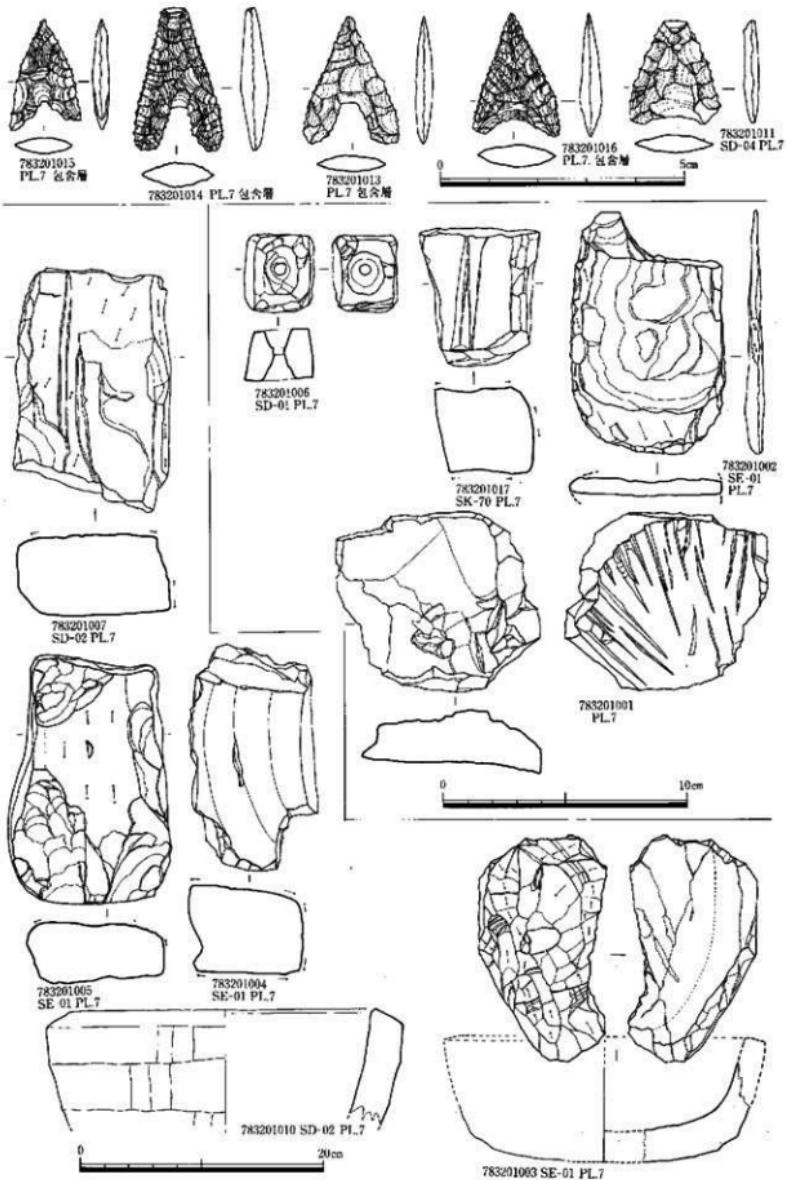


Fig.10 石器実測図 (縮尺 1/1、1/2、1/4)

器皿で、底部の切り離しはヘラ切りで板状压痕が残る。器壁は薄手で、体部は丸みをおびナデを施す。復原口径10.2cm、器高1.5cm。雲母、砂粒を多く含み、淡い黄褐色を呈する。(大庭友了)

(2) 石器 (Fig.10 PL. 7)

石鎌 (Fig.10-01011・01013～01016) 包含層から13～16、SD-04から11が出土した。11・13がサヌカイト製、他は黒耀石製である。11は先端部と右脚部を欠損する三角鎌。素材の剥片に両側面から押圧剥離を施すが、剥離自体は大まかである。風化が進んでおり、遺構の時期とは一致しない。他の石鎌と同様、縄文時代に属する。13は脚部の抉入部が長い二等辺の石鎌である。脚部が長いため腰が高い。先端部の身幅は狭いため一層鋭利な感がある。剥離はやや大きな剥離痕を残すが、押圧剥離である。脚部の形状はやや不規則であるが、完形品である。14は先端部が欠損する黒耀石製の石鎌である。全体に細かな剥離を施し、素材の剥片の痕跡は認められない。両側片には、さらに細かな押圧剥離が施されている。断面は厚く大型の石鎌である。15は脚部が不規則であるが、先端が鋭利な完形の石鎌である。右側片部は細かな押圧剥離が施されているのに対して、左側片部は大まかな剥離で終了している。これは裏面でも同様な剥離が施されていることから、厚さの調整が行われた可能性が高い。16は全面に細かな押圧剥離が施されているため、両側片は鋭利な仕上がりである。抉入部は浅く、ゆるやかな弧を描く。

磨製石斧・砥石 (Fig.10-01002・01004・01005・01007・01017) 02は粘板岩製の磨製石斧である。一時は砥石とも考えたが、形状および刃部を形成する研磨から、一応扁平磨製石斧としておく。砥石は4点図示した。04・05は大型で、SE-01から出土し、全面に煤の付着が認められる。07はSD-02から出土した。17はSK-70から出土した砂岩製砥石で中央部が凹む。04は花崗岩、05・07は砂岩である。

滑石製品 (Fig.10-01001・01006・01003・01010) 滑石製品はこの他に15点程出土している。01は石鍋洞部付近の破片を再加工している。03は石鍋の胴部で復原口径27cmを測る。表面には煤が多量に付着している。06は長方体の中央部に上下から穿孔しているので用途は不明。10は石鍋の口辺部で復原口径29cmを測る。(二宮忠司)

第4章 まとめ

原第2次の調査では、遺構の残存状態は余りよくなかった。遺物としては、縄文時代の石鎌のほか、弥生時代の土器・石器や古墳時代の須恵器を除くと、土師器・黒色土器・陶磁器・石鍋など古代～中世の時期に限られる。溝・掘立柱建物・井戸状遺構および土坑は、これに対応した遺構としてまとまりをもつもので、土師器・黒色土器・白磁などから10～12世紀ころの遺構と考えられる。原第2次については「弥生中期の溝」などが検出されたとされているが、弥生時代の溝と特定することはできない。

原第2次の西南側に隣接して原第5次調査地点がある。ここでは、2×3間を主体とした南北棟が北東部に集中している(福岡市埋文報告書第213集の付図4頁参照)。原第2次のSB-02やSB-05はこれと方向が一致しており、第5次を含め井戸状遺構を中心に溝に囲まれた集落を構成していたと推定することができる。土坑やピットとしたなかには、このような掘立柱建物の柱穴が含まれていると思われるが、判然としない。原第6次・9次・10次・12次・14次・16次・17次地点でも掘立柱建物群や溝が確認されており、この一带に古代～中世(8・9～15・16世紀頃)にかけての拠点的な集落があつたことを示している。昭和53年というかなり以前の、限られた調査期間のなかでの成果を不十分ながらもこのような形で報告することができた。この間多くの人々の協力を得られたことに感謝をし、報告書のまとめとしたい。

図 版

PLATES



1. 発掘調査遠景（南から）



2. 調査区近景（南東から）



3. 調査区全景（南から）



4. 調査区近景（南西から）



5. 南東部発掘風景（南から）



6. 土坑発掘風景



7. 遺構検出状況（北から）



8. 遺構検出状況（南から）

PL. 2



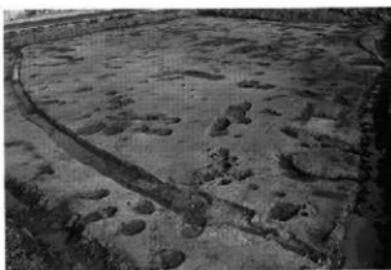
1. 西側の道構（北から）



2. 西側の道構（南から）



3. SD-01（西から）



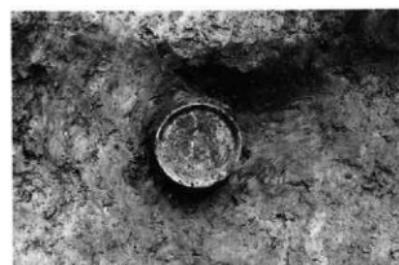
4. SD-01近景（北西から）



5. SD-01（南から）



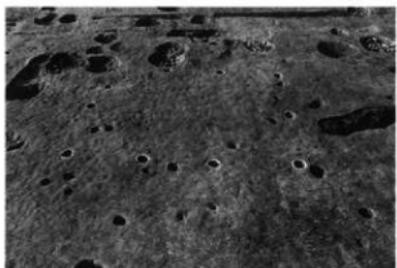
6. SD-01の断面



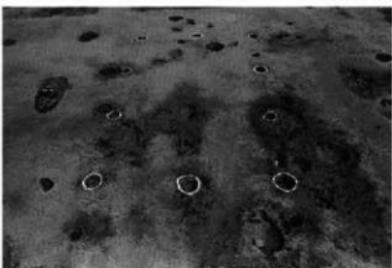
7. SD-01出土土器（00044）



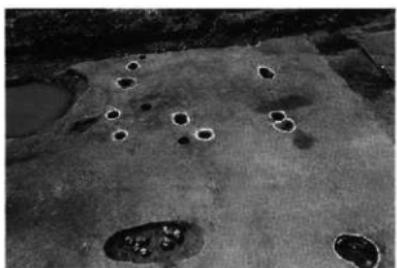
8. SD-02遺物出土状態



1. SB-01 (南から)



2. SB-02 (南から)



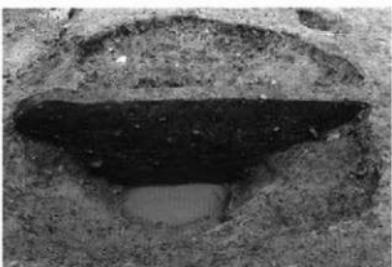
3. SB-03 (東から)



4. SB-04 (南から)



5. SE-01 (発掘中)



6. SE-01 (発掘後)



7. SE-01出土土器 (00005)

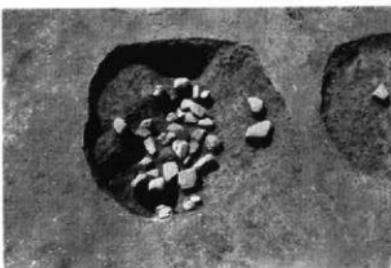


8. SE-01出土土器 (00029・00026)

PL. 4



1. SK-01 全景



2. SK-03 全景



3. SK-07 全景



4. SK-07 出土土器 (00068)



5. SK-09 全景



6. SK-09 出土土器 (00069)



7. SK-90 全景

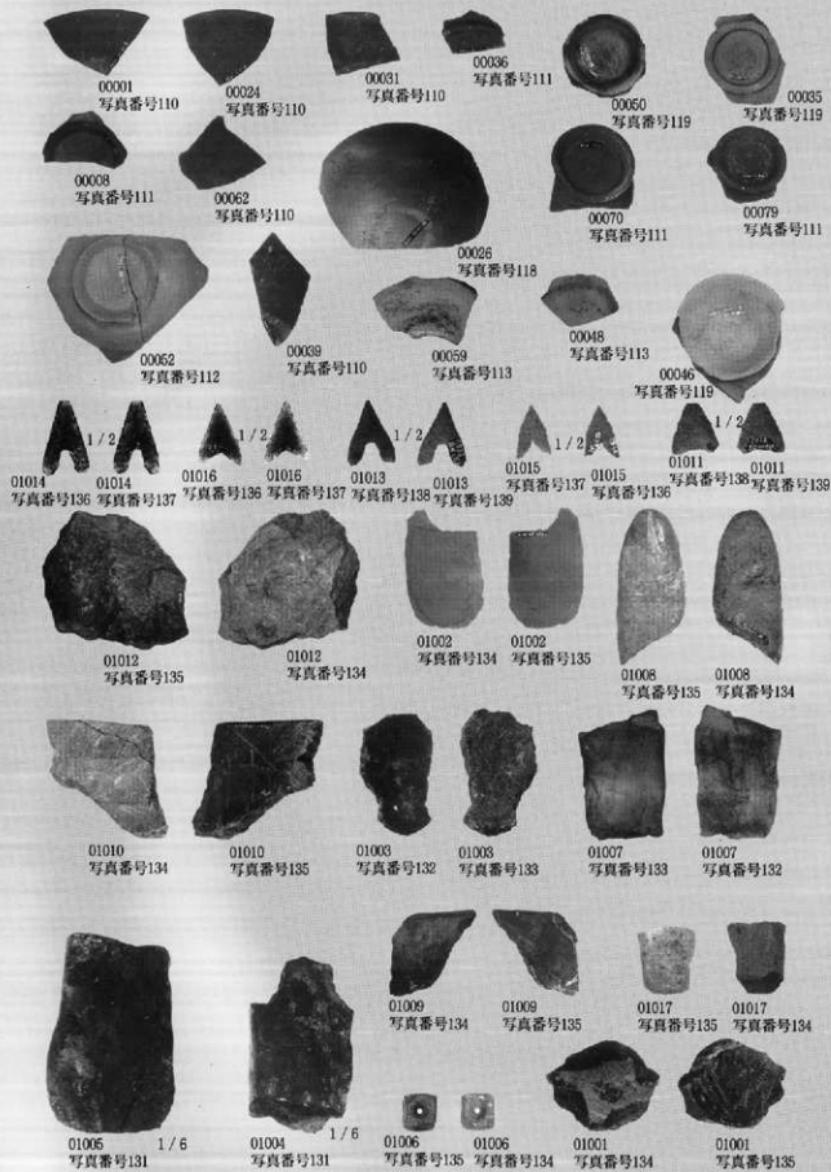


8. SK-90 出土土器 (00076)





出土土器 - 2 (縮尺 1 / 6 以外は 1 / 4)



出土土器-3・出土石器(縮尺1/2・1/6以外は1/4)

福岡市早良区
原遺跡9

—原遺跡群第2次発掘調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第544集

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
原遺跡調査会

印刷 鶴川島弘文社
